

E 32 都市階級別にみた食肉消費の構造変化
奈良女大家政 堤 伸子

目的 昭和30年代後半以降において、食生活の近代化がいろいろなしく進んだといわれ、肉類をはじめとする動物性タンパク質食品への支出割合の急速な上昇などの食生活の変化がみられる。しかし、このような変化も、地域によってその様相を異にしているように思われる。とくにわが国では、都市化の進展と社会の近代化の間には密接な関係があるので、食生活の近代化にも関連があると考え、近代化の中心食品である肉類について、計量経済学的手法を用いて、都市階級別に消費構造の変化を明らかにしようと試みた。

方法 分析には、次に示す動学モデルを用いた。

$$\log Z_t = \beta_0 + \beta_1 \log Y_t + \beta_2 \log P_t + \beta_3 \log Z_{t-1}$$

Z_t は当期の消費量、 Y_t は当期の所得、 P_t は当期の価格、 Z_{t-1} は習慣効果をあらわすと考えられる前期の消費量、 $\beta_0 \sim \beta_3$ は推定すべきパラメータである。このモデルを用いて、都市階級別に計測し、ステップワイス・チャウテストを行い、構造変化の時期を見つけた。計測は、昭和40～59年の20年間について、肉類、牛肉、豚肉、鶏肉を対象として行った。なお、分析に用いた資料は、総理府統計局「家計調査年報」「消費者物価指数年報」である。

結果 すべての都市階級において、消費構造の変化がみられた項目は、牛肉・豚肉であった。また、構造変化の時期にも差がみられた。